

# 「タイ・カセサート大学 短期留学 報告書」

獣医学群 獣医学類 5 年 日高健太

## 1. 準備物について

私は、持ち物を(必須)と(あると望ましい)に分けました。

### (必須)

#### ・ 現金

出発前に新千歳空港で 10 万円を両替しました。初日は 1 タイバーツ(以下、THB)あたり約 5.5 円(10 万円→17,800THB)でした。スワンナプーム国際空港では約 4.8 円/THB であり、タイ到着後に両替した方がお得でした。両替率は場所によって異なるため、事前に調べておくことをおすすめします。帰国時は両替率が低くなりますが、私は有料プラン(1,000 円)を利用したことで、通常 3.5 円/THB が約 4.8 円/THB に改善されました。

\* 両替率は日によって変わるので、事前確認が必要でした。

\* タイではクレジットカードが利用できない店舗が多い印象を受けました。

#### ・ パスポート

空港手続き以外に、寮のルームキー受け取り時にも提示を求められました。

#### ・ eSIM

私は、「World eSIM」を利用し、16 日間・データ通信無制限で 6,540 円で契約しました。寮の Wi-Fi は不安定なことが多かったため、外出先での通信を考慮し、無制限プランを選択して正解でした。本プランには電話番号が含まれていませんでしたが、緊急時を考えると電話番号付きの eSIM も有用だと思います。

#### ・ 着替え

私は4日分を準備しました。寮内にはコインランドリーがあります。「Equine unit」と「Exotic」の実習はスクラブで着用しますが、それ以外の実習は私服で参加しました。強い日差しや室内の冷房に備え、長袖も持参した方が良いと思いました。

## (あると望ましい)

虫よけスプレー、日焼け止め、つば広帽、1day コンタクトレンズ、サコッシュ、高容量モバイルバッテリー(2 個)、海外対応ドライヤー、ポケットティッシュ、ウェットティッシュ、ビニール袋、延長コード、ハンガー、メモ帳。

※多くは現地で購入できます。

---

## 2. タイでの生活

### 言語

カセサート大学(Kasetsart University、以下 KU)の教員や学生は英語を話せる人が多かったですが、学外では英語が通じにくい場面も多くありました。日常的な会話には、英語または Google 翻訳(タイ語)アプリを使用しました。

### 人との交流

KU の学生は親切で、積極的に話しかけてくれました。仲良くなったタイの人には Instagram や LINE を交換すると良いと思います。生活上で困った際に相談できるタイの友人の存在は大変心強かったです。

---

## 3. カンペンセンキャンパスでの生活

### 寮(International Dormitory 3)

- 2 人部屋、ユニットバス、土足可(スリッパがあると便利です)
- 冷房は強力
- ハンガーは 2 本のみ
- 冷蔵庫あり
- 500mL 水 PET を毎日 2 人分補充してくれます
- 毎朝の清掃サービス(床拭き、タオル交換、コップ交換) → タオル不要
- Wi-Fi は不安定 → 通信量が無制限の eSIM をおすすめです
- コンセントは少ない → 延長コードが有用でした

- 電圧は約 200V。PC・スマホは問題ありませんでしたが、日本製ドライヤーは使用時に焦げ臭さがあつたため、現地での購入をおすすめします
- トイレtpペーパーは設置されていますが流さず、その都度、袋に廃棄していました。そのためビニール袋を大量に持っていて助かりました。日本製のトイレtpペーパーだと流せたかもしれません。

## 安全管理

清掃員の方が毎日部屋に入るため、パスポートは外出時に携帯しました。寮に置く場合は清掃を断ることも可能です。

## コインランドリー

洗濯機・乾燥機が各 5 台あり、友人と 3～5 日分をまとめて利用しました。

## 移動

キャンパス職員から自転車を借用できました。タイヤの空気入れは警備員さんが対応してくれました。

## 食事

- 一部の学生が腹痛を経験しました。医務室で薬を受け取れるため、事前に場所を確認しておくことをおすすめします。
  - 辛さの程度は必ず確認が必要です。現地の「辛くない」は日本人にとって非常に辛い場合があります。
  - 食堂は朝 6 時から営業しています。実習前に朝食をとることも可能です。セブンイレブンなどのコンビニでは、1 食 40～60THB 程度で購入できました。
  - 食堂のほか、KU 構内には Café、ラーメン屋、アイス屋など様々なお店があります。どれも大変おいしかったです。
  - タイでは、タイ料理以外に日本食も食べられるため、food sick にはならなそうに感じました。うらやましいです。
-

## 4. 実習

- **写真撮影**: 基本的に許可されていましたが、事前確認をした方がマナー的に良いと思います。「Exotic」の実習では、飼い主さんがいても写真を撮ってよかったです。「Equine」の実習では、手術に関しては、SNS にあげず自学のためなら良いと許可をもらいました。
  - **語学準備**: 臨床用語の学習は必須です。特に「Equine」の先生方の説明では、専門用語をよく使用しており、聞き取りが大変でした。先生の説明を録音・録画して後日、日本人学生同士で復習しました。
  - **学習環境**: 寮の机は 1 室に 1 つのみです。共同でしっかり勉強する際は図書館やカフェテリア 1、B 棟のコモンルームを利用できます。寮のベッドで横になりながら、その日の実習の復習を皆で行うこともありました。
  - **呼称**: 先生には「Dr.」、年上の学生やスタッフには「P' (ピー)」を付けて呼びました。
- 

## 5. 学び

### 8/24 タイ到着

バンコク市内にあるスワンナプーム国際空港に到着後、KU スタッフの方付き添いで、カンペンセンキャンパスの寮まで移動しました。途中、スーパーに寄ってタイで初めての食事を取りました。私はラーメンを食べましたが、具として入っていた「チリ」を食べてしまい、あまりの辛さに悶絶してしまいました。タイに行く際は是非お気を付けください。現地の人に辛さを聞くと良いと思います。しかし大変おいしかったです。また翌日の朝食はセブンイレブンで購入しました。



(カンペンセンキャンパスの寮)

## 8/25 キャンパス案内

朝の朝食は、皆で寮の外のテーブルで食べました。その後、KU の職員の方に、実習場所や食堂、コンビニ等を案内していただきました。敷地内はとても広く、場所を覚えるのは大変だったため、Google Map に場所をその都度登録しました。キャンペーンの移動には google map に大変お世話になりました



(寮の近くのテーブルにて朝食)

## 8/26 Farm visit (Cattle and Goat)

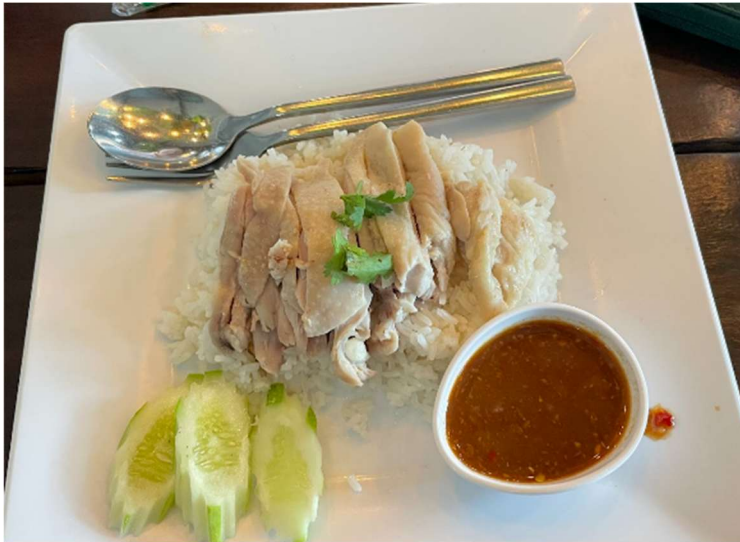
午前 9 時に獣医学部の建物に集合し、まず牛の農場を案内していただきました。そこで学んだのは、牛の品種改良の歴史についてです。たとえば、在来種(感染症に強い)とブラフマン種(体が大きく暑さに強い)を掛け合わせ、さらに肉質の良いシャロレ一種を組み合わせることで、地域環境に適した改良が行われてきたことを知りました。

また、牧場の管理方法についても学びました。牧草地を約 40 区画に分け、2 日ごとに放牧場所を変えていく「輪換放牧」が行われていました。1 周して戻ってくる頃には牧草が再生しており、寄生虫も日光により減少するそうです。さらに、牧場は傾斜地に作られており、高い位置から牛糞を流すことで、効率的に全体へ肥料をまく工夫もなされていました。実際の現場ならではの工夫を知ることができ、とても印象に残りました。

午後はヤギの農場に移動し、採血とビタミン剤の注射を体験しました。私は普段から牛の採血は行っていましたが、ヤギは初めてでした。牛と比べると皮膚が柔らかく、血管も浅い位置にあるため、思った以上にスムーズに採血できました。これまで経験してきた牛との違いを実感できたことは、大きな学びになりました。



(ヤギの頸静脈から採血中)



(昼食:カオマンガイ 90 バーツ)

## 8/27 Equine unit

この日は、3人ずつ2組に分かれて、馬の診療に参加する班とエキゾチックアニマルの診療に参加する班に分かれました。私たちの班は馬の診療に参加しました。

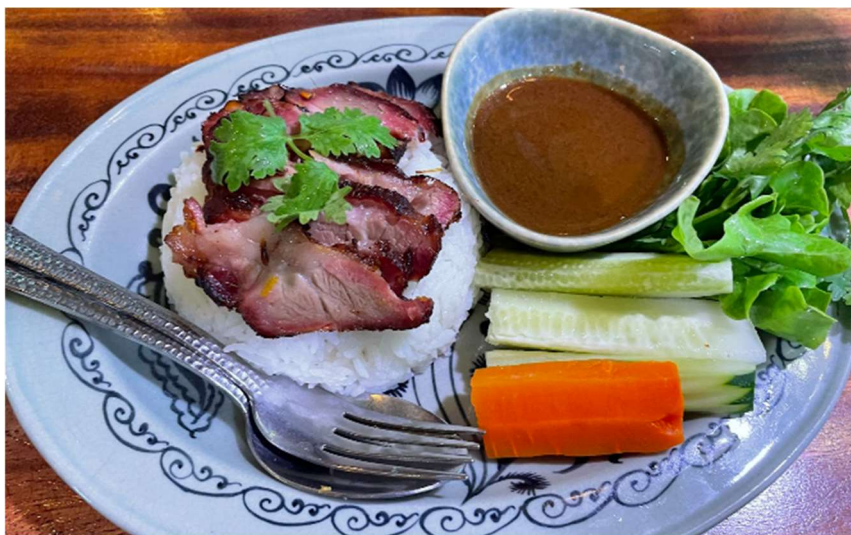
診療にはKUの5年生も実習として参加しており、一緒に見学することができました。診療内容としては、蹄病の症例が多い印象を受けました。そのほか、去勢手術の様子を見学する機会もありました。今回の症例は競走馬で、気性が荒いために去勢に至ったとの説明がありました。また、目の白濁が認められる馬や、心嚢水が貯留している馬の治療も見ることができました。

診療の際には、先生方が専門的な用語を交えて説明してくださいましたが、英語を聞き取れない部分や内容を理解しきれない部分もありました。そのようなときには、まず酪農学園大学(以下、RGU)の学生同士で話し合ったり、スマートフォンで調べました。その後質問内容をまとめて、先生や同席していたKUの学生に質問し、丁寧に教えていただきました。

お昼ご飯もKUの学生と一緒にいき、診療で分からなかった部分を補足してもらいながら、雑談も交えて交流することができました。



(蹄病の馬:治療として赤線部分を削った)



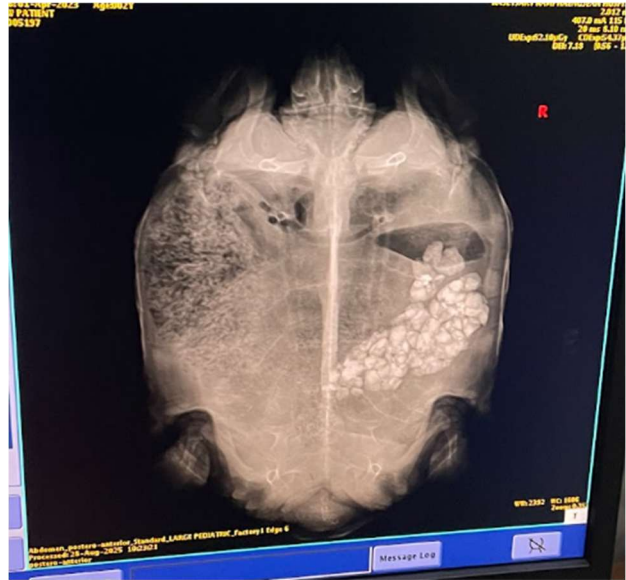
(昼食:カーオ・ムーデン、100バーツ)

8/28 Exotic / Wildlife / Raptor center

午前中は診療室で、飼い主の方が連れてきたペットの診察を見学しました。対象となった動物は、インコ、アヒル、オウム、リクガメ、カメレオンなど多岐にわたっており、日本の大学ではなかなか経験できない種類の動物に触れることができました。

診断では、触診や視診に加えて、糞便検査、鼻スワブ、血液検査、レントゲン撮影などが行われました。治療では、投薬、注射、点滴といった処置が行われ、犬や猫と同様の手技が適用されている一方で、種による特徴に応じた工夫が必要であることを学びました。

午後はまず象の診療所を訪問しました。私の班が行ったときは診療が混雑していたため、近くで診察の様子を見ることはできませんでしたが、別の班は至近距離で観察できたそうです。象の保定方法としては、胴体を木に結びつけて固定する方法が用いられており、診察の際には耳からの採血や直腸検査が行われると説明を受けました。その後、野生の猛禽類の保護センターも見学させていただきました。ここには交通事故や環境要因など、さまざまな理由で負傷した野鳥が集められていました。治療やリハビリを経て健康を取り戻した個体は、再び野生へと返されるとのことでした。



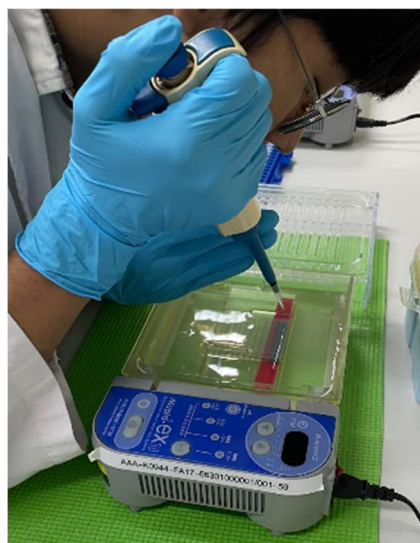
(カメのレントゲン撮影: 消化管に石が詰まっている。)

## 8/29・9/1 Diagnostic Center

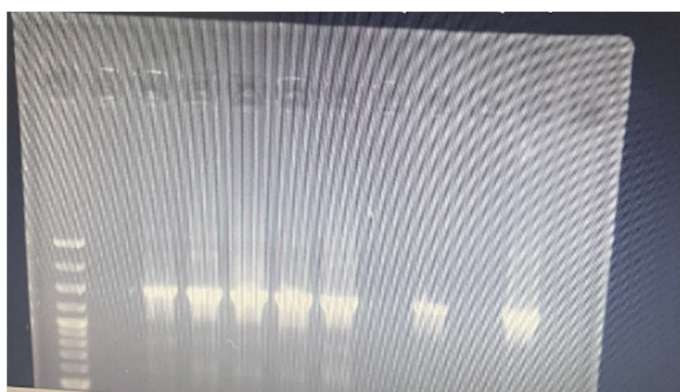
初日は、PCR(Polymerase Chain Reaction)と RAA(Recombinase-Aided Amplification)の実験を見学しました。PCR では、鳥の羽から抽出した DNA をサンプルとして用い、PBFD(Psittacine Beak and Feather Disease: オウム類嘴羽病)の検出を行いました。実際に「Exotic animals」の実習中には、PBFD が疑われるコザクラインコの羽を採取し、PCR 検査に提出する場面を目にしました。臨床現場で得られたサンプルが、このように研究室で分子生物学的検査に結びつくことを知り、臨床と基礎のつながりを実感しました。

RAA は今回初めて学んだ方法で、DNA を増幅する点は PCR と同じですが、PCR のようにサーマルサイクラーで温度を変化させる必要がなく、一定の温度で反応が進むという特徴がありました。サンプルとしてはアヒルの羽から DNA を抽出し、DuCV(Duck Circovirus: アヒルサーコウイルス)の検査を行っていました。DNA 増幅後の検出方法についても違いがあり、PCR 産物は電気泳動によって確認しましたが、RAA 産物はイムノクロマトストリップを用いて判定しました。現場で迅速に結果を得られる

方法である点に興味を持ちました。2 日目は、ELISA (Enzyme-Linked Immunosorbent Assay) を実施しました。豚の血清を用い、PCV (Porcine Circovirus: ブタサーコウイルス) に対する抗体の有無を検出しました。私は普段、研究室で PCR や ELISA を行っていますが、使用するサンプルや試薬、細かな手順の違いを比較できたことで、新しい視点を得ることができました。その結果、実験方法そのものへの理解がより深まり、今後の自分の研究活動にも活かせると感じました。



(左図: KU の大学院生による実験の説明、右図: PCR 産物を電気泳動にかける)



(左図: PCR の結果、右図: RAA の結果)

## 9/2～4 水産(アクアティック)

この期間は、水産分野に関する講義と実習が行われました。3 日間で、2日は東京大学の学生3名と一緒に実習に参加しました。講義では、魚の養殖管理について学びました。具体的には、フィルターによる水の浄化、水温の調整、飼育密度の管理、餌の種類や給与方法、疾病の治療、さらに需要と供給や価格の変動といった経済的な側面についても幅広く取り上げられました。その後、実際にどのように養殖を運営・管理していくかについて、学生同士でディスカッションを行い、各々英語で発表しました。

昼食後には魚の養殖場を訪問し、コリドラスやパンガシウスなど、日本ではあまり見られない種類の魚や、さまざまな体色のメダカ、エイ、エビなど観察することができました。2 日目は、タイで日常的に食べられているティラピアの養殖場を見学しました。ティラピアはもともと、日本からタイへ食料難を救う目的で導入された歴史を持ち、その後タイ国内で広く普及してきた魚です。現在ではタイの養殖業の中心的存在となっており、その背景を知ったことで、単なる生産魚種としてだけでなく、社会的・歴史的な意義を持つ魚であることを理解できました。その昼食は、ティラピアがでる料理を、養殖のオーナーの方にご馳走になりました。白身魚のような味で、大変惜しかったです。3 日目には、2 日間の講義と実習を振り返り、獣医師として養殖魚にどのように診断や治療を行うべきかについて、学生間でグループディスカッションと発表を行いました。魚病に対する臨床的な視点を養うとともに、経済や社会背景を踏まえた水産分野での獣医師の役割について考える貴重な機会となりました。



(妊娠しているアルビノのエイ: 尾の根本の膨らみは胎児によるもの)



(左図:ティラピア、右図:ティラピアの養殖場)

#### 9/4 バンケンキャンパスへ移動

タイでは8月から9月は雨季にあたるそうですが、実習期間中は幸いにも晴れの日が多く、予定通りに活動できたことに感謝しました。「Aquatic Medicine」の実習を終えた後、カンペンセンキャンパスの寮をチェックアウトし、バンに乗ってバンコク市内にあるバンケンキャンパスへ移動しました。移動には2時間ほどかかりました。

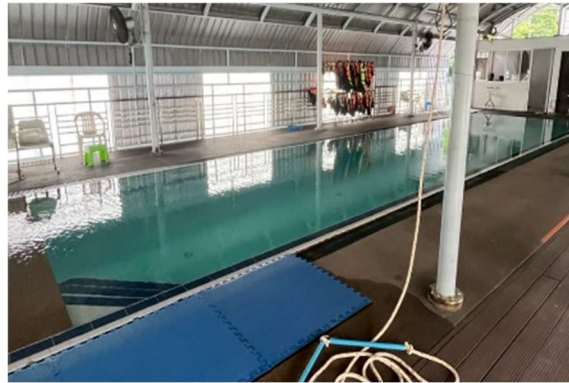
宿泊先はキャンパス近くの「RECOTC」というホテルでした。部屋はユニットバスで、シャワーとトイレの間に仕切りがなく少し不便に感じましたが、それ以外は快適に過ごすことができました。夜は翌日のプレゼンテーションに向けて、友人たちと協力しながらスライドを作成しました。仲間と意見を出し合いながら準備を進めたことで、発表への不安も和らぎ、良い時間となりました。

#### 9/5 発表・伴侶動物病院見学

この日は、2週間の学びを PowerPoint にまとめ、各自が英語でプレゼンテーションを行いました。事前に話す内容をすべてメモして準備していたため、過度に緊張することなく発表することができました。しかし、発表中には KU の先生方から質問を受ける時間もあり、即座に答える力も求められました。次回に備えとすれば、発表原稿の準備だけでなく、想定される質問への対応も事前に考えておく必要があると感じました。

午後には、KU の伴侶動物病院を案内していただきました。病院の規模は、人の大規模病院に匹敵するほどであり、その充実ぶりに驚かされました。特に印象的だったのはリハビリテーション施設で、歩行が十分でない犬や猫のために水中を歩行できるプ

ールが備えられていました。伴侶動物に対してここまで高度なケアが行われていることを実際に見学でき、大変貴重な経験となりました。



(両図:リハビリ用のプール)

## 6.まとめ

今回の留学では、日本とは異なる環境の中で獣医学を学び、実習に参加することができました。実習だけでなく生活面でも新しい体験が多く、毎日がとても刺激的でした。英語や Google 翻訳を使いながらタイ語でコミュニケーションを取ったり、慣れない生活に戸惑ったりしつつも、タイ料理のおいしさに感動し、日本に帰りたくないと思うほどでした。

また、現地で多くの友人ができたことも大きな収穫でした。もっと獣医療のことや、それ以外のことも深く語り合えるようになりたいと感じ、それが英語学習のモチベーションにもつながりました。環境や文化が異なる中で、どう対応していくかを考えながら過ごした時間は、自分にとってかけがえのない経験になったと思います。

将来、必ずしも海外で活動するかどうかはまだ決めていません。しかし、この経験を通して視野が広がり、獣医師としての将来を考えるうえで大きなきっかけになったと感じています。



(プレゼンテーション終了後の写真)